

中晩生カンキツ「はるみ」の露地栽培における年内収穫果の品質と浮皮防止技術					
[要約] カンキツ「はるみ」は、12月下旬に完全着色となり、糖度が12度を超える。12月下旬に収穫して常温で貯蔵した果実は、1月下旬に収穫した果実と同等に品質が優れている。果実の浮皮は9月のカルシウム剤処理により発生程度が軽減される。					
担当部署	園芸研究所・果樹部・常緑果樹研究室			連絡先	092-922-4946
対象作目	果 樹	専門項目	栽 培	成果分類	技術改良

[背景・ねらい]

「はるみ」は、「清見」と「ポンカン」の交配で育成された高品質な中晩生カンキツである。糖度が高く、「不知火」より成熟が早く1月～2月に出荷できる品種として、県内での普及が期待されている。今後、栽培の拡大を図るためには露地栽培における成熟期ならびに収穫期を明らかにする必要がある。このため、果実の成熟に伴う着色、糖度、クエン酸含量など品質の経時的変化とともに栽培上課題となっている浮皮の発生防止技術について明らかにする。

(要望機関名：福岡普(H7))

[成果の内容・特徴]

1. 果実は10月下旬以降に着色が始まり、12月下旬には概ね完全着色となる。浮皮は11月から発生し、1月には顕著になる。糖度は12月下旬には12度まで増加する。クエン酸含量は11月には1.5g/100ml、12月下旬には1.0g/100ml程度まで減少する(図1)。
2. 12月下旬に採収後、1ヵ月常温貯蔵した果実は樹上で越冬させ1月下旬に採収した果実と品質の差がない(表1)。貯蔵中の果皮障害、腐敗は少ない(データ略)。
3. 果実の浮皮は、9月のカルシウム剤散布により発生程度が軽減される(表2)。

[成果の活用面・留意点]

1. 「はるみ」の収穫期や浮皮症の防止技術として福岡県果樹栽培技術指針に登載できる。
2. 果実は冬季の寒害を受けるまでに収穫して、貯蔵後品質を高めて出荷する。
3. 生育期間の土壤水分が少ないとクエン酸の減少が抑制されるので、土層の浅い園地などでは夏季の土壤水分の保持に努める。
4. 浮皮は2L級以上の大きい果実で著しいため、LM級果の生産を目標とした摘果を行う。

[具体的データ]

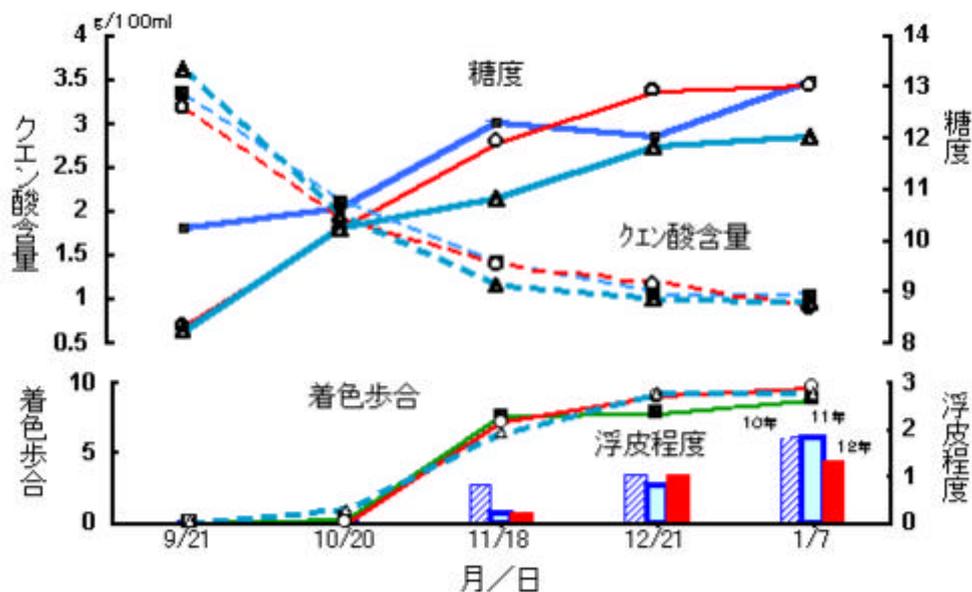


図1 「はるみ」の着色、浮皮、糖度、クエン酸含量の経時的変化¹⁾

- 注) 1. 露地栽培、平成10年産：○、11年産：△、12年産：□
 2. 着色歩合は、果実表面の着色した部位の割合を無(0)～完全着色(10)で表示
 3. 浮皮は、無(0)、軽(1)、中(2)、甚(3)の4段階で表示

表1 「はるみ」の収穫時期と果実品質(平成11年)

収穫時期	着色程度	果皮色	浮皮程度	果形指数	果重(g)	果肉歩合(%)	糖度(Brix)	可溶性固形物(g/100ml)	クエン酸含量(g/100ml)	甘味比
1月収穫	9.7	8.0	1.8	113	218	70.0	13.5	14.8	0.94	15.9
12月収穫 ¹⁾	9.5	7.9	1.4	117	197	72.4	13.1	14.4	0.92	15.8
貯蔵後	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
12月収穫時	9.7	6.9	1.0	110	206	71.9	12.9	14.1	1.01	14.0

注) 1. 調査月日は平成12年1月21日。12月収穫は12月21日に採収し、1ヵ月常温貯蔵、1月収穫は1月21日採収。

表2 「はるみ」のカルシウム剤処理¹⁾と浮皮発生程度(平成12年)

区	着色歩合	浮皮発生率(%)	浮皮程度	浮皮発生度
加シム	9.77	82.5	0.8	27.2
無処理	9.67	100.0	2.1	70.7
	NS	*	**	**

- 注) 1. カルシウム剤処理は1ℓ/1000倍液を9月7、18、27日の3回散布
 2. 平成13年1月12日調査、1区1樹3反復、1樹L級果40果調査
 浮皮発生率：浮皮発生果数/全調査果数×100
 浮皮程度：無(0)、軽(1)、中(2)、甚(3)の4段階達観調査
 浮皮発生度：浮皮程度(0、1、2、3)×果数×100/(3×全調査果数)
 3. t検定により、*は5%、**は1%水準で有意差あり

[その他]

研究課題名：晩生柑の品種・系統適応性
 予算区分：経常
 研究期間：平成12年度(昭和55年～継)
 研究担当者：松本和紀、矢羽田二郎、堀江裕一郎